



TITLE:

出血ショックに関する実験的研究
特に門脈系出血ショックの特異性
について (Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

斎木, 仁

CITATION:

斎木, 仁. 出血ショックに関する実験的研究特に門脈系出血ショックの特異性について. 京都大学, 1966, 医学博士

ISSUE DATE:

1966-09-27

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/211955>

RIGHT:

氏 名	齋 木 仁 さい き ひとし
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 313 号
学位授与の日付	昭 和 41 年 9 月 27 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	出血ショックに関する実験的研究 特に門脈系出血ショック の特異性について
論文調査委員	(主 査) 教 授 本 庄 一 夫 教 授 木 村 忠 司 教 授 半 田 肇

論 文 内 容 の 要 旨

最近、臍頭部癌をはじめ門脈領域の手術が盛んに行なわれるようになったが、他の領域の手術と異なり、門脈系は微細な損傷でも大出血を起こし、すみやかにショックに陥る場合がしばしば経験されている。著者は犬を用いてその門脈と股静脈から脱血実験を行ない、門脈系出血と体静脈系出血の病態生理について比較解析を試みた。

すなわち、体重 10～15 kg の雑種犬を門脈脱血群と股静脈脱血群に分け、各群について次の 3 方法による脱血実験及び輸血・還血実験を行なった。

- 1) 間歇脱血。5 cc/kg を 30 分間隔で脱血。
- 2) 間歇脱血後輸液。上記脱血にて動脈圧 50 mmHg 以下に達せしめ、そのまま 60 分間維持後 30 cc/kg の点滴静注輸液を行なった。
- 3) 連続脱血後還血、サイフォン法で 1 m の落差吸引による脱血を行ない、動脈圧 50 mmHg 以下に達せしめ、そのまま 60 分間維持後全脱血量を点滴静注にて還血した。

股動脈圧、股静脈圧の変動は 3 方法のいずれの場合も門脈脱血群と股静脈脱血群の間に有意の差を認めなかった。

門脈圧は 3 方法のいずれの場合も門脈脱血群において脱血終期（脱血死直前）及びショック期後半に上昇を示し、それは輸液あるいは還血により増大された。

致死出血量、循環血漿量の変化は門脈脱血群、股静脈脱血群の間に差がなかった。

生存日数は門脈脱血群が股静脈脱血群に比して、はるかに短縮された。

ヘマトリット値の減少率は門脈脱血群、股静脈脱血群共に大体一致した値をとった。

肝機能検査成績は過半数の種目に機能低下及び障害を示し、門脈脱血群は股静脈脱血群に比しその低下及び障害度が高く示された。

肝の組織学的検索では、門脈脱血群は股静脈脱血群に比し肝の実質障害が高度に認められた。

以上の実験結果より門脈圧は門脈脱血群において特異的な変動を示し、3方法のいずれの場合にも脱血終期（脱血死直前）あるいはショック期（動脈圧 50 mmHg 以下）に圧の上昇を認める。この場合輸液あるいは還血を行うとかえって圧の上昇を増大させることが判明した。

門脈脱血群における生存日数の短縮、肝機能の低下及び障害、肝実質障害の高度発現などから門脈脱血の生体に与える影響が大きく、門脈出血ショックの特異性が立証されたと信ずる。

したがって門脈領域の手術に際しては門脈系出血の特異性を十分に認識し、細心の注意が必要であると考ええる。

論文審査の結果の要旨

脾頭部癌をはじめ門脈領域の手術が最近盛んに行なわれるようになったが、門脈破損による出血は容易に大出血に連なり、すみやかにショックに陥いる場合が経験せられる。

そこで、著者は犬で門脈と体静脈系である股静脈からの脱血実験を以下の3方法を用いて行ない、門脈系出血と体静脈系出血との病態生理について比較検討を加えた。すなわち、1) 間歇脱血として 5 cc/kg を30分間隔で脱血する。2) 間歇脱血で動脈圧を 50 mmHg 以下に達せしめ、その状態を60分維持後 30 cc/kg の点滴静脈内輸液、3) サイフォン法で 1m 落差吸引による脱血を行ない、動脈圧を 50 mmHg 以下に達せしめ、その状態を60分維持後全脱血量を点滴静注して還血。

その結果、股動脈圧、股静脈圧の変動は門脈脱血群と股静脈脱血群との間に有意の差は認めない。

門脈圧は3方法とも門脈脱血群では脱血終期、ショック期後半に上昇を示し、輸液、還血によってその傾向は増強する。

生存日数は門脈脱血群の方がはるかに短い。

致死出血量、循環血漿量、ヘマトクリット値は両群に大差ない。肝機能障害、組織学的変化も門脈脱血群の方が著明である。

以上の所見より門脈よりの出血は特異の経過を示し、生体に不利なことが判明した。

本論文は学問上有益であって医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。